

新刊紹介

著者	綿野 泰行, 清水 建美, 鈴木 三男, 里見 信生, 本多 郁夫, 依田 清胤
著者別表示	Watano Yasuyuki, Shimizu Tatemi, Suzuki Mitsuo, Satomi Nobuo, Honda Ikuo, Yoda Kiyotsugu
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	37
号	2
ページ	8p.
発行年	1989-12-25
URL	http://doi.org/10.24517/00055975

の型 (SUGIMOTO *et al.*, 1987) であり, *F. dalloniana* は *F. inumae* と同じであり, *F. nubicola* は *F. nipponica* と同じであった。

2. *F. nipponica* と *F. nubicola* は同じランナー型に入るが, 第一節間と第二節間の長さの変化では, 一致しなかった。このことは今後の調査を必要とする。

3. 節間長のオーダーによる変化は *F. nubicola* は

拡大相対成長則のモデルによくフィットしていた。つまり, 最初は節間が長くなり, その後一定の値をとるような傾向がある。それに対して, *F. dalloniana* のランナーは振動していると考えたモデルに合う。このことは, 奇数節と偶数節がセットになっており, 規則的に変化するためと考えられる。

(Received May 1, 1989)

○ 真砂久哉氏の御逝去を悼む (木下慶二) Keiji KINOSHITA: Obituary of the Late Mr. Hisaya MANAGO

真砂久哉氏が平成元年5月26日に闘病の甲斐なく, 享年60歳の若さで亡くなられたことは, 痛惜のきわみであります。氏は林業家の長男として林業経営にたずさわるかたわら, 植物ことにシダの研究に執念を燃やされました。

温和で人をそらさないお人柄は植物を通じて広く各方面に知己を得られ, 昭和50年には紀州シダの会を結成され, 広く同好の士の提携・交流をはかられました。氏は全県下をくまなく踏査し, 和歌山県のシダ相の解明に大きな業績を残されましたが, 氏が考えておられた紀州シダ植物相の集大成を見るに至らずして他界されたことは, 心残りであったことと推察いたします。また氏は大塔山の自然林の保護運動や環境庁の第一回の植生調査などにも中心的活動をされ, 一方文化財保護にも関心を持たれて, 田辺市の文化財審議会委員として活躍するかたわら, 熊野物産初志などの復刻を成しとげられ, 田辺市誌のシダ植物篇の執筆が絶筆となったということです。植物の研究に殉ぜられたような気魄を感じます。心から御冥福をお祈り申し上げます。

○ 筒井貞雄 福岡県植物目録 第1号 (シダ植物) 福岡植物研究会 (〒833 筑後市大字山ノ井76 益村聖方)。昭和63年4月1日発行。B5判, 516頁。頒価10,000円。

福岡植物研究会では全5巻構成の「福岡県植物目録」の完成をめざしており, 第1巻(シダ植物)が昨年発行された。本書は3部からなり, 第1部は標本目録で, 金井方式のメッシュごとに産地名, 標本番号が記載されている。このメッシュは, 第3部の分布図に対応しており, 優れた整理の仕方だと思う。第2部は, 目録中全種の標本のシルエットである。私が特に感心したのは, 各種の標本産地の列記の次にある〈ノート〉欄である。著者の豊富なフィールドワークを背景として, 生育環境の簡潔な描写, 近縁な分類群との関係についての考察が断然光っている。じっくり検証してみたいくなる作業仮説がいっぱいで, 本当に困ってしまう。(綿野泰行)

○ 沼田俊三 写真と記録 青森県のラン 花と山のガイド 平成元年4月20日発行。B5判, 208頁, 自己出版, 定価3,000円。

自然史の研究は長い年月を要する。青森市の開業医である著者が, 本業のかたわら, 一種のランを撮影するのにうまくいって2~3年, たいていは5~6年も足を運び続け, 昭和56年の着手以来まる8年の歳月をかけて, 遂に青森県のラン73種すべての撮影に成功した。その成果を1冊に結集したのがこの本であり, 前半は131枚のカラー写真による73種のランとその生育地の記録, 後半は「ランの花の基礎知識」「花と山のガイド」「植物写真をはじめたい人のために」「出会いということ」などの文章構成となっている。植物写真のガイドを書かれるだけに, 写真は実にすばらしく, 中でも東北地方初発見のミスズラン, 稀有のクシロチドリなど垂涎的である。どこに出しても恥しくないで映えだけに, 植物名に学名のないのが惜しまれる。申し込みは〒030 青森市花園1-5-9 著者あて。(清水建美)

○ 小林徳樹 西神戸 (神戸市西区及びその周辺地域) の植物 平成元年1月19日発行。B5判, 141頁, 自己出版。頒価1,500円+〒260円。

これは神戸市西区を中心とした丘陵地帯(最高標高330m), 田園地帯および都市部の植物誌である。ほとんど人為環境化されたほぼ250km²の調査域の中にシダ植物78種, 種子植物1,028種が記録され, アオイゴケやヒメミコシガヤやノジギクなどのほぼ東限を占める植物, アリマグミヤフサタヌキモなどのほぼ西限を占める植物, ヒガンマムシグサやセンダイスゲなどの稀有の植物も確かめられた。さすがに帰化植物は多く帰化率は12.9%に上るが, 都会の自然の中にも精査をすればなおいくつもの発見があることは教訓的である。申し込みは, 〒673 明石市大蔵谷清水583-36 著者あて。(清水建美)

- 6: 131-144, pls. 1-3.
- . 1963. Further study of plant remains in *Pinus trifolia* beds, Central Hondo, Japan. Kobutsu To Chishitsu, Special no. 31-th founding anniversary: 80-93 (in Japanese).
- MIZUNO, K. and MOMOHARA, A. (in press). Shobudani Formation and terrace and alluvial deposits. In: ITIHARA, M (Ed.): Osaka Group, Sogen-sya, Osaka (in Japanese).
- WANG, C. W. 1961. The forests of China, with a survey of grassland and desert vegetation. 313pp. Harvard Univ. Press.

摘 要

大阪府和泉市若樫東方の大阪層群最下部(鮮新統)

から、カリア属堅果化石を発見した。これは層位が確かなものではいちばん時代の新しいカリア属の産出例である。この堅果は表面に細かい溝があり、果壁に空隙がないことから *Carya striata* MIKI に同定した。*C. striata* を産出する層準の大型植物化石群集は、木本 45 分類群、草木 29 分類群から構成され、このうち 13 分類群は消滅種である。その構成をみるとチャンチンモドキ、チャセンギリ属、セツリミアサガラ属、チシャノキなど、亜熱帯や暖温帯に分布する分類群が多く、冷温帯に分布する分類群は少ないことから温暖な古気候が復元された。日本での他の地点の産出例も合わせて考えると、カリア属は中新世から鮮新世には温暖な気候下で生育していたと考えられ、これは中国の現生種の生育環境と類似している。(Received May 16, 1989)

○ 大場秀章 秘境崑崙山を行く一極限の植物を求めて— 岩波書店, 1989年6月20日発行。岩波新書, 194頁, 490円。

今年6月の天安門事件で水を差されたとはいえ、近年の日中共同の植物調査にはめざましいものがある。その中で、本書は著者が1988年に多数の中国人科学者からなるカラコルム・崑崙山(こんろん, くんるん)総合科学考察隊の唯一の外国人隊員として参加した時の記録である。

著者はこれまでネパール、インドヒマラヤや中国の雲南地方へ何度も植物調査に行っており、ヒマラヤ山脈を中心とした地域の高山植物について強く興味を持ち、研究を続けてきている。今度の崑崙山脈はチベットとタクラマカン砂漠にはさまれた乾燥地帯のまっただ中の高山であり、ヒマラヤの高山帯や高山植物との比較が随所でなされていて興味深い。ただ、充分承知して行ったとはいえ、植生の余りの貧弱さに参っている様子が、植物がときたま見られたときの喜びの深さとなって行間に滲んでいる。近年の学術調査は各種技術の進歩や調査地域の開化にともない以前より安全となつて、「学術探検」という感じは殆ど失われてきたが、この調査隊はまだまだ探検に値する地域があることを教えてくれる。氷河の午後の洪水であわやの目にあったことや、広大な砂漠を山を目指してひたすら走り続けるジープ、砂漠の中に忽然と湧き出す泉、ウイグル族の風習、シルクロードを彷彿とさせる市場など、自分もぜひ行ってみたい、という気になってしまう。

著者が「わが国では崑崙山の名は広く知られているが、崑崙山脈そのものについての実際の知見は乏しい」と書いているように、我々、温帯の湿潤地帯にすんでいるものにとっては植物や植生についてのイメージを喚起することはほとんど出来ない。その意味で著者の目を借りて崑崙山の植物に触れることが出来る本書ははるか離れたかの地への夢を誘うものである。ただ残念なことは岩波新書としてどうしようもないことだが本文中に出てくる風景や植物がカラー写真でみれたらとつい思ってしまう。それは著者の研究の成果とともに別なかたちでお目にかかれることを期待してやまない。(鈴木三男)

○ 表紙写真の説明：刀装に用いられた牡丹の彫金

中国で、花の王と言えは牡丹で、その栽培が盛となったのは、唐の玄宗皇帝の時代と言われるが、当時遣唐使として入唐した人々により、わが国に持ち帰られたという証は無い。

降つて平安時代には、栽培されたようで、時の権力の座に着いた藤原一族の近衛・九條・鷹司家は、紋章に使用し、天皇家の菊紋とともに權威のあるものであった。したがって、絵画・彫刻の題材として、しばしば用いられているが、中でも狩野山樂筆、京都大覚寺の障屏画(重文)や日光東照宮本殿(国宝)ならびに陽明門(国宝)の彫刻は、はなやかであり、夙に知られている。

写真は、戦災から免れ、わずかながら残った拙宅の道具の中にあつたもので、刀の外装に用いられた金具(上は縁頭、下は栗形)で、銀に牡丹を彫つてある。(里見信生、本多郁夫氏撮影)

- Himalayan Pteridaceae. *Caryologia* 13: 619-650.
- MITUI, K. 1965. Chromosome studies on Japanese ferns (1). *Journ. Jap. Bot.* 40: 117-124.
- 中藤成実, 1975. イノモトソウとオオバノイノモトソウの中間型の細胞学的研究. *植物研究雑誌* 50: 119-125.
- NAKATO, N. 1988. Notes on chromosomes of Japanese pteridophytes (2). *Journ. Jap. Bot.* 63: 214-218.
- ROY, R. P., SINHA, B. M. B. and SAKYA, A. R. 1971. Cytology of some ferns of Kathmandu valley. *Brit. Fern Gaz.* 10: 193-199.
- SCHIFFERDECKER, I. 1957. Untersuchungen über die Gattung *Pteris*, im besonderen die Zytologie ihrer apogamen Formen. *Zeit. induct. Abst. Vererb.* 83: 163-183.
- SHIEH, W. C. 1966. A synopsis of the fern genus *Pteris* in Japan, Ryukyu, and Taiwan. *Bot. Mag. Tokyo* 79: 283-292.
- 田川基二, 1959. 原色日本羊歯植物図鑑. 270 pp. 保育社.
- VERMA, S. C. and KHULLAR, S. P. 1965. Cytogenetics of the western Himalayan *Pteris cretica* complex. *Ann. Bot., N. S.* 29: 674-681.
- WALKER, T. G. 1958. Hybridization in some species of *Pteris* L. *Evolution* 12: 82-92.
- . 1962. Cytology and evolution in the fern genus *Pteris* L. *Evolution* 16: 27-43.

(Received March 13, 1989)

○ 桃谷好英：生物進化の分子的基礎—化学分類学 A5判, 264 ページ。豊饒書館, 平成元年6月1日発行。定価 3,300 円 (税込み)

本書は、豊饒書館の現代植物学講座第1期16冊のうち、第3冊目として発行された。著者はいわゆる orthodox taxonomy をマスターされた上、早くから化学分類学の重要性を痛感され、自らも種子タンパクの分析法を考案されるなど、斯界の第一線で活躍されているユニークな植物分類学者であり、かつ、卓越した生化学者である。

この本は、第1章「問題点の変遷」、第2章「形質の評価」、第3章「種について」、第4章「生命の起源」、第5章「生物進化」、第6章「自然科学の一環」の6章から成るが、一読して何よりも印象深いのは、データの紹介や解釈に終始するのではなく、著者の学問や生物に対する独創的なみかたが述べられていることである。たとえば、「たとえ人為分類であっても、分類学上と上げることができる形質は、たいてい系統的な意味があるだろう (第1章)」とか「アイソザイムをマーカーに使った生理・生態的研究はいまはほとんどないが、手軽に多くの情報が得られる点から見て可能性があり、また、生理的变化をとらえた種間の比較に進む必要がある (第2章)」とか「生物をネオ・ダーウィニズムだけで解釈する時代はすでに終わっていて、生物の基本構造との兼ね合わせで扱わない限り、進化は理解できない (第6章)」といった主張に著者の面目躍如たるものがある。ところで、こうした本筋に比べれば些細なことではあるが、欲をいえばオルガネラ DNA による系統分類へのアプローチや、植物成分の地理的変異などの課題についてももう少し詳しい議論があったらと思うし、一方、図が小さすぎたり印刷がよくなかったり、あるいは、同一ページに葉緑素とクロロフィルの両語があるなど用語の不統一がみられる事は惜しいことである。それにしても、いわゆる分類学者も、今やタンパク質にしる DNA にしる生化学を理解せねばならぬ時代となった。著者の言葉を借りれば、「一人の分類学者の手で1,000種以上の種を含んだ科のモノグラフが書かれた歴史からみても、いまさら手に余るとの言い草は通用しない。」この本は、そのための格好なガイドを務めてくれる好著である。 (清水建美)

○ 「石川の自然 ブナ林」編集委員会編 「石川の自然 ブナ林」橋本確文堂(〒921 金沢市増泉4-10-10)。1989年3月31日発行。B5判, 95頁。定価2,800円。

植物に限らず自然に親しむ人々の間で、特に残雪に映えるブナの新緑の美しさを口にする人は多い。しかしブナ林の持つ魅力はそれだけではない。本書は、そんなブナ林が垣間見える様々な表情を、四季折々に摘み取ってまとめあげた写真集である。掲載された写真はプロの写真家の手によるものではなく、何らかの形でブナ林と関わりのある、いわば素人の人達によって撮影されたものとの事であるが、眺めていると彼らのこの林に対する愛情が伝わって来る様である。また読者は、後半に載せられた“ブナ林の生態学”、“ブナ林の生活学”、“ブナ林の開発と保存”といった解説を合わせて読むことによって、この林をより身近なものとして感じることができよう。本書にはさらに、石川県内に限られてはいるものの、現在残されている11カ所のブナ林が紹介されている。是非一度訪れて実際にその美しさに触れて見られては如何だろうか。 (依田清胤)

(1955)として発表し、さらに同市内袋板屋町で得られた転石も *P. maedae* と同定した (OGURA, 1961)。しかし、いずれも転石あるいはよそから持ち込まれたものでその時代ははっきりしていない。ただ、金沢市郊外には新第三紀前期中新世の医王山累層が広く分布し、この層が珪化木を豊富に含むことから、これらのヤシの化石もこの時代のものだろうと推定されてきた。一方、加来 (1937) は福岡市郊外の名島付近の古第三紀層からヤシ科と見なせる材化石を報告しているが、記載と対比が不十分なため、その性格はよく分かっていない。

1989年4月14日、犀川上流の金沢市熊走町の医王山累層が露出する山中の小沢から金沢大学理学部技官の中村健二氏が珪化木を採集し、筆者に同定を求めた。この化石 (標本番号 53553) は直径 30 cm もある大きなもので、断面には明らかに単子葉植物特有の均一に散在した維管束がみられる。維管束は横断面で円形あるいは楕円形をしており、長径は 300 μm 位、明確な1層の内皮をもち、幹の中心側に2~数本の道管からなる原生木部、中央部に2~3本の直径 100 μm 前後の丸い道管からなる後生木部、その外側に薄壁でやや大きめの細胞からなる篩部がある。この維管束の外側には直径 500 μm 前後の繊維組織塊がある。また、基本組織は薄壁で細長い大型の細胞からなり、細胞間隙に富む。基本組織中に断面円形で直径 150 μm ほどの繊維束が散在している。また後生木部の道管の穿孔は横棒の数の少ない階段状である。これらの形質を東大資料館所蔵の基準標本と比較したところ、横断面での維管束の分布数が *P. maedae* では 1 cm^2 あたり 25 本前後なのに対し、この化石では 20 本前後とやや少なく、また個々の維管束の直径もやや細いものの、そのほかの多くの形質においてよく一致することから、この種に同定した。さらに、*P. maedae* の基準標本が竹根石の名のごとく、その標本の下方に不定根を密生していて、明らかに株の基部であるのに対して、この化石では幹の横断面に於て横走する維管束 (葉跡) が多く、しかも個々の維管束が細く、その分布密度も低いことから、*P. maedae* の幹の上方部分の化石であると考えることが出来る。なお *P. kagaense* は小倉が指摘しているように維管束が 1 cm^2 あたり 60 本あるいはそれ以上と極端に多く、この化石とは違いすぎるなどから別種と考えておくのがよいと思われる。

以上のことから、これまで産出層準がはっきりしておらず、江戸時代の加賀の豪商銭屋五兵衛が南蛮貿易から持ち帰ったなどの伝説を持っている竹根石や河床の転石としてえられたヤシ類の材化石が、本化石の発見により、金沢郊外の医王山累層に由来するものであることがかなり確実になったと言える。

なおこの報告にあたって、標本を提供された中村健二氏、基準標本を快く貸して下さった東京大学総合研究資料館大場秀章博士に感謝します。

References

- KAKU, I. 1937. On a monocotyledonous fossil wood discovered in Najima, near Fukuoka City (in Japanese). Jour. Geol. Soc. Japan 44: 187-192.
- OGURA, Y. 1952. A fossil palm in Kenroku Park at Kanazawa. Trans. Proc. Palaeont. Soc. Japan, N. S. 8: 223-230.
- . 1955. A fossil palm trunk from Kanazawa. Trans. Proc. Palaeont. Soc. Japan, N. S. 19: 85-87.
- . 1961. Further note on a fossil palm trunk from Kanazawa. Trans. Proc. Palaeont. Soc. Japan, N. S. 44: 146.
- (Department of Biology, College of Liberal Arts, Kanazawa University, Kanazawa 920 〒920 金沢市丸の内1-1 金沢大学教養部生物学教室)

○ 同記念事業会 松尾秀邦教授退官記念論文集 1989年2月発行。B5判、246頁。非売品。

金沢大学在職時に本会の編集委員を努めておられた松尾秀邦博士が本年3月を以て愛媛大学を退官された。本書は博士の退官記念論文集で同大学理学部地球科学教室の方々を中心となって発行されたものである。巻頭に石川県白峰村のライン博士の記念碑の前に立つ博士の近影があり、松尾教授の紹介、略歴のあと、著作論文目録があって、そのあとに教え子や同僚、ゆかりのある人たちが執筆した本文がある。本文は2部に分かれており、第1部が学術論文集で、花粉孢子化石、石灰質ナンノ化石、貝 (音川動物群) やオイカワの化石、木材化石フローラ、地質層序、鉱石、第四紀地盤の応用地質学など、氏の幅広い業績と知識を反映して、実に様々な地質学、古生物学及び鉱物学的研究16編が収められている。第2部は第1部と打って変わってぐっと柔らかい記念文集であり、本会の編集委員である里見信生氏の「松尾さんの思い出」など26編が収録されており、様々な方々が博士にまつわるおもしろい思い出話を語ってくれている。

非売品であるが多少の残部が博士の手元にあると聞くので、ご希望の方は直接博士 (松尾秀邦 〒790 松山市大手町2-1-1 大手町ハイツ 505号) までお問い合わせ願いたい。 (鈴木三男)

摘 要

札幌市とその近郊においてオオバコ (*Plantago asiatica* L.) 個体群セイヨウオオバコ (*P. major* L.) 個体群の分布とその生育地環境の比較を行った。両種とも札幌市のほぼ全域に分布するが人為的影響が大きい市街地や農地の区域ではセイヨウオオバコ個体群のほうがオオバコ個体群と比べて優勢に分布する傾向が見られる。一方、森林内の比較的明るい遊歩道や林道には、セイヨウオオバコの侵入は非常に少なく、オオバコが優勢に分布・生育している。両種ともスズメノカタビラ、セイヨウタンポポ、シロツメクサなど共通した草本種と共に群落を形成するが、セイヨウオオバコを含む群落は群落被度が小さく、群落高も低い傾向が見られる。また、そのような群落が形成される生育地の光環境は良好である。それに対し、オオバコは被度や高さがより大きく密な群落内へも

侵入し、セイヨウオオバコが生育できないような光環境下でも個体群を形成することが出来る。市街地と森林が接する所では、両種の混成群落が多くみられる。このような区域で両種の個体が含まれるように4m×4mの方形区を設置し Association analysis (KERSHAW, 1960)を行った結果、比較的小さい方形枠サイズで解析すると両種の個体は、しばしば隣接して生育することもあり、生態分布の相違を明瞭に把握することはできないが、枠サイズを大きくするにしたがってこれら両種が異なった生態的立地に分離して生育する状態が鮮明になってくる。以上のことより、オオバコとセイヨウオオバコの生態分布の違いはアレロパシーや競争などの直接的な相互作用より、むしろ生育地の微環境要因によって制御されていると考えられる。

(Received June 2, 1989)

○ 堀田満ほか(編) 世界有用植物事典 平凡社。1989年8月25日発行。四六倍判、総ページ1505、モノクロ図1,300点。定価24,000円(税込)。

日本語で書かれた有用植物事典は、いくつかの園芸植物事典はあるものの、有用植物百般にわたるものはほとんどない。この本は、かつての北隆館の資源植物事典(1949)以来、実に40年ぶりに出た本格的な有用植物事典である。本辞典は、編集委員代表の堀田さんはじめ6名の先生方を編集委員に、各分野の専門家14名を編集専門委員に配し、339名の執筆者を動員して15年の歳月をかけてつくられたという。内容は、植物編(1-1126頁)、事項編(1127~1438頁)および索引(欧文・中国名・事項、1439~1499頁)の3部構成である。植物編では一貫して「植物の属」を大項目としてとり上げ、まず属の所属や分布を簡明に記し、その下に種名(学名と和名)を小項目にとって、それぞれに生態・形態・利用の解説をおこなうという体裁になっている。全項目数約3,500、収録植物ほぼ8,500程である。次の事項編では、麻・油・油脂といった順序で一般項目を138個にまとめて、文化史や利用面をとり扱っている。こうして、植物編をいわば縦の解説とすれば、事項編は横の解説であり、縦と横の糸で織りなされた本事典は、他に類例をみない誠に強靱なものとなった。記事そのものは、一部平凡社の最新版世界大百科辞典から援用されたものもあるが、編集陣の努力で一貫した方式にまとめ上げられた。随所に入れられた1,300点余の精緻な植物図や分布図などのモノクロ図も嬉しい。最近のビジュアル主義の出版界にあつて、カラー写真やモノクロ写真が一枚も使われていないというのも本書の大きな特徴である。

もう何年も以前から畏友の堀田さんが事あるごとにコンピュータにせつせと有用植物の情報をつめ込んでいた姿をみかけていたが、そうした長年にわたるたゆまぬ努力がここに見事に開花したのである。堀田さんはじめ編集委員各位に心からおめでとうといいたい。(清水建美)

○ 嘉弥真国男 緑が丘学園の植物図鑑 昭和63年2月発行。B5判、前文22頁+図鑑160頁。非売品。

本書は、表題に示すとおり、緑が丘学園内に自生ならびに栽培されている植物の写真(白黒とカラー)を、1頁に2枚づつ計294種、収録した植物図鑑であるが、著者は、沖縄少年院矯正専門職にあつて、ここに収容されている少年の矯正教育に、緑が如何に彼等の精神安定効果に役立つかを知り、本書を編集したようである。

アンケート調査によると、学園に収容された少年は、一般児童に比し、植物の緑に対する意識は低いようで、非行少年たちのほとんどが、木や草花に対して関心が少ない。この無関心さが、情操の乏しきや心の貧しきに結びついているようで、青少年の健全育成の一つとして、植物に関心を持たせることの必要性を強く感じていると言われる。前文の“学園内植物を教材としての活用について”は、このような問題に関心を持たれる方には、参考になることであろう。(里見信生)

○ Tatemu SHIMIZU: Further Materials for Seedling Morphology of the Genus *Impatiens* (Balsaminaceae)(1) ツリフネソウ属植物の実生の形態追記(1) (清水建美)

The writer reported that the seedlings of the genus *Impatiens* (Balsaminaceae) are much diversified to be classified to two major groups and seven subgroups, mainly on the basis of the Thai plants (SHIMIZU, 1982, 1985). In this and the following occasional notes, some more materials will be given to taxonomy. Here the seedlings of four Indian plants are shown as follows. All of them are characterized by decussate leaves. And, *I. benthamii* belongs to Sect. Subverticillate sensu Hook. f., while the others are all included in Sect. Oppositifolia sensu Hook. f. Subgroup name should be referred to the writer's previous paper (SHIMIZU, 1985). The voucher specimens are preserved in KANA.

Impatiens chinensis L. (SHIMIZU, 1982, Fig. 1) Subgroup F. Cotyledons epigeal, but hypocotyls not elongated. Leaves with stipular glands. Voucher: Meghalaya: Nonshillong, East Khasi Hill, alt. 1,900m, T. SHIMIZU 39001.

I. benthamii v. STEENIS (Fig. 2) Subgroup F. Cotyledons epigeal, but hypocotyls not elongated. Leaves pubescent on both sides. The third and the upper internodes pubescent. Voucher: Meghalaya: Thadlangksien, Janita Hill, alt. 1,500m, T. SHIMIZU 39002.

I. oppositifolia L. (Fig. 3) Subgroup E. Cotyledons epigeal, hypocotyls elongated. Leaves glabrous, with stipular glands. Voucher: Western Ghats: Karnataka: Yowansett, Munnar, alt. 1,500-1,800m, T. SHIMIZU 39003.

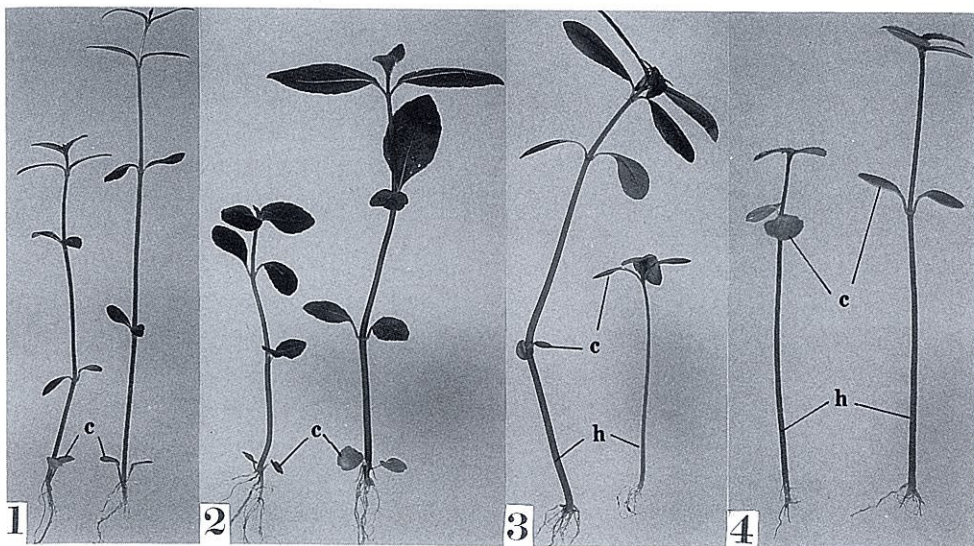
I. kleinii WIGHT et ARN. (Fig. 4) Subgroup E. Cotyledons epigeal, hypocotyls elongated. Leaves pubescent above, with stipular glands. Voucher: Western Ghats: Karnataka: Naduvattum, Munnar, alt. 1,600m, T. SHIMIZU 39004.

The writer wishes to thank Prof. R. S. TRIPATHI of Northeastern Hill University, Shillong, and Prof. C. J. SALDANAH of St. Joseph College, Bangalore, for their kind guidance during his stay in India in 1988.

References

- SHIMIZU, T. 1982. Seedling morphology in some Thai *Impatiens* and its taxonomic significance. Jour. Fac. Lib. Arts, Shinshu Univ., Nat. Sci., No. 16: 85-97.
 —. 1985. Additions to seedling morphology of the genus *Impatiens* (Balsaminaceae). Jour. Fac. Lib. Arts, Shinshu Univ., Nat. Sci., No. 19: 227-233.

(Department of Biology, Faculty of Science, Kanazawa University, Marunouchi, Kanazawa, Japan. 金沢大学理学部生物学教室)



Figs. 1-4: Seedlings of four *Impatiens* species. 1. *I. chinensis* $\times 0.46$, 2. *I. benthamii* $\times 0.47$, 3. *I. oppositifolia* $\times 0.40$ and 4. *I. kleinii* $\times 0.57$. c: cotyledon, h: hypocotyl.

生)。栃木県の動物と植物編纂委員会、の形態に就て。日林誌 31: 14-21.
山谷孝一。1949. 恐山山岳林に於けるヒバ林の土壤 (Received Sept. 29, 1988)

○ 藤原陸夫 秋田県植物目録 (第2版) 秋田植生研究会, 平成元年7月1日発行。B5判, 65頁。非売品。

秋田県植物目録 (第1版) は, 同著者により発行されている (昭和47年12月15日, 北陸の植物の会)。ただし著者名は, 当時の旧姓望月となっている。

本書は, その訂正増補版で, 現在知られる秋田県産高等植物165科, 794属, 2,084種, 7亜種, 153変種, 58品種を登載した総目録である。

○ 植之原耕治 愛知県音羽町産植物目録予報 昭和63年10月25日発行。A5判, 39頁。900円 (含送料)。音羽町は, 愛知県の東端に近く, 東を豊橋市・豊川市, 西を岡崎市に接する, 東西8km, 南北5kmの町である。この目録は, 1984~1986の3ヶ年間に, 調査した結果をまとめて, 自費出版したものである。

紹介者は, 本務の多忙の中で, 努力されたことについて敬意を表するが, 今後一層の御精進を希望する。

なお, 御求めになられる方は, 著者宛 (愛知県宝飯郡音羽町赤坂台703) に御申込み下さい。

○ 三重シダの会 三重県のシダ植物 三重県良書出版会 (三重県安芸郡河芸町上野2100), 平成元年5月1日発行。A5判, 188頁。2,500円 (送料300円)。

三重県は, 南北に長く地形が複雑で, 且, 気候に差違があるので, シダ植物の種類に富み, その数は, 300に達する。したがって, シダ植物に興味を持つ方々が多く, “三重シダの会”が結成されている。本書は, その会員10氏が分担執筆したもので, 序文に, 県内のシダ研究を志す人のための参考書に, また, 県外の方々が三重県のシダの現状を知っていただくための資料として編集したと述べている。

○ 監修: 林 弥栄, 写真: 平野隆久, 解説: 畔上能力・菱山忠三郎・西田尚道 野に咲く花 (山溪ハンデイ図鑑) 山と溪谷社, 平成元年10月1日発行。12cm×20.3cm, 624頁。2,900円。

山溪ハンデイ図鑑は, 野に咲く花, 山に咲く花, 高山の花, 樹木 (1~2冊) を予定するもので, 本書は, その第1冊目であると言う。また, 大きさや重さを, 野外に持って行けるということを考えて決めたと言う。

先づ, 通観して気づくことは, 殊様なカメラを使って撮影した超アップ写真がすぐれている。類書にない特徴であろう。特にカヤツリグサ科やイネ科などの花の細部が良くわかり, 興味深く感じた。

○ 大滝末男 日本産アヤメ科植物 ニュー・サイエンス社, 平成元年5月30日発行。B6判, 126頁。930円。

巷間で“いずれアヤメかカキツバタ”と言われ, 両者の良く似ていることのたとえになっている。この仲間は, 万葉の昔から人々にしたしまれて来た。本書の内容は, 第1章が分類学の展望で, アヤメ科・アヤメ属の特徴と日本産の種類と分布, 第2章が個々の種類の解説, 第3章がアヤメ属の色素成分となっているが, 第2章の各種に記されたノートの中に, 著者の博学ぶりをうかがうことができる。

○ 斉藤信夫 草木雑感—蟹田にて— たねの会, 平成元年3月20日発行。B6判, 168頁。頒価不詳 (著者宛, 青森県東津軽郡蟹田町上蟹田62-2, に御たづね下さい)。

著者は, 津軽半島の蟹田に住み, この地の中学校に御勤務されている。序文に「一般の人々のレベルでは自分がこの世に存在したという事実を一世代くらいの期間しか保存できない。それに比べると芸術家は作品によって数百年ないし数千年も生き長らえるし, また, 学者や物書きは活字によってやはり, 数百年ないしそれ以上の期間長らえる。著者は自分の人生を中学校の教師として, また, 植物を愛する人間として生き続けたいと思うと述べて居られるように, 本書を通読すると, その中に著者の生きざまを拝見することが出来て感銘を覚える。

○ 金井弘夫編 日本植物分類学文献 目録・索引3 植物文献目録刊行会 (株式会社アボック社内, 〒247鎌倉市岩瀬905), 平成元年3月30日発行。A4判, 652頁。17,500円。

本書は既刊の第1巻 (1973~1982), 第2巻 (1973~1985) に続くもので, この巻では1960~1986に発表された文献の内, 前2巻に含まれていない約13,218件が収録されている。植物分類および地理・生態等の研究者にとっては, 必備の書籍である。私は, 最近まで, この巻の発行を知らなかった。出版社から刊行されたという通知がなかったからで, 本誌の会員の方でも, 知らない方が居られるのではあるまいか。(里見信生)

山中二男 Tsuguo YAMANAKA	
赤石山脈のヤマハハコ属, Notes on <i>Anaphalis</i> in the Akaishi Mountain Range	5
植物おぼえがき Miscellaneous Notes on Japanese Plants	8
米澤信道 Nobumichi YONEZAWA	
テングノコヅチの新産地と分布, New Growing Districts and Distribution of <i>Tripterospermum involuile</i> YONEZAWA	25
ヒガンバナの一新変種と一新品種, A New Variety and a New Form of <i>Lycoris radiata</i> (L'HERIT.) HERB.	73
吉野由紀夫 Yukio YOSHINO—下田路子 Michiko SHIMODA	
新刊紹介 Book Reviews	4, 7, 8, 56, 64, 106, 112, 119, 120, 128, 135, 136, 148, 158
雑録 Miscellaneous Notes	42, 112; 会記 Announcements 68, 153

○ O. POLUNIN and A. STAINTON. *Flowers of the Himalaya*. 1984. A 5 判. 30+580 頁, カラー図版 128 枚, 線画図版 64 枚. 29.5 英ポンド; 同. *Flowers of the Himalaya, a supplement*. 1988. 11+86 頁, カラー図版 128 枚. 225 インドルピー; 同. *Concise Flowers of the Himalaya*. 1987. 11+283 頁, カラー図版 128 枚. 19.5 英ポンド. 以上 Oxford University Press, Delhi.

D. MIEROW and T. B. SHRESTHA. *Himalayan Flowers and Trees*. Sahayogi Press, Kathmandu. 再版 1987. B 6 判. 208+2 頁, カラー写真多数. 225 ネパールルピー。

A. STORRS and J. STORRS. *Enjoy Tress. A simple guide to some of the trees and shrubs found in Nepal*. Sahayogi Press, Kathmandu. 1987. 216 頁, カラー写真多数. 250 ネパールルピー。

異国に旅したとき, 植物の名前が分からなくて困ることはよくあり, そんなとき適当な図鑑類が無いものかとつくづく思うもので, それは世界で有数の植物の宝庫であるヒマラヤでは最も切実なものであった。筆者が初めてネパールを訪れた 1983 年にはそのようなものはなく大いに困ったものだが, ヒマラヤ全体を網羅した図鑑 *Flowers of the Himalaya* が 1984 年に本編と 1988 年に補遺が相次いで出版された。著者の一人 STAINTON は大のヒマラヤ好きで長年にわたって本業のかたわらヒマラヤの植物調査をしてきており, その多数の標本と写真を用い, イギリスの植物学者 POLUNIN との共著として出版した(補遺発行時点で POLUNIN は死去している)。本書はヒマラヤに分布する植物について, 高山植物を中心に本編では 1459 種, 補遺では 584 種を扱い, 簡単な記載とその線画あるいはカラー写真が多く種の種について示されている。さらに植物学の用語についても線画付きで簡単に解説してあり, 非常に役立つ。本編だけの時は写真掲載種が少ないため大いに不便を感じていたものだが, 補遺では新たに多くの種の記載と写真が多数収録され, この 2 冊があれば, インド平原に近い熱帯域を除いてはヒマラヤ地域の植物は大体の検討がつけられるようになった。なお, *Concise* は本編のコンサイズ判で, 掲載種を 1002 種に絞り, 科や属の説明を省き, 記載文も圧縮したものであるが, 線画, カラー図版と用語集はそのまま転載されている。ヒマラヤを訪れるときの必携の書といえるが, 難を言えば印刷がインドでなされているのでカラー印刷での色ずれや乱丁などをよく見かけることで, 本を買うときは何冊かを見比べてなるべく良いものを探す必要がある。

上述の本がかなり専門的であるのに対し, あとにあげた 2 冊は一般向けのものである。*Himalayan Flowers and Trees* では序論のあとにネパールで見かける植物の科の簡単な解説と, 針葉樹, シャクナゲ属, 主な広葉樹の垂直分布図のあと, 著名なトレッキングコースのルートマップとそれに沿ってみられる樹や花, 山, 人びとの暮らし, 植物利用, はては蛙(実はその背後に見えるアサが目的の写真)といったものまでが豊富なカラー写真で示されている。著者の一人の T. B. SHRESTHA 博士はネパールの植物研究の第 1 人者である。一方, *Enjoy Trees* は副題にあるようにネパールの街や村でよく見かける樹木についてのガイドブックで, 簡単な序論のあと, カトマンズ市内とそれ以外の, アルニコハイウエー(カトマンズとチベットのラサを結ぶ道路)沿い, ゴタワリの植物園の樹木, ポカラへの道沿いとポカラ市内など, 場所場所で風俗とともに花や樹形の沢山のカラー写真がちりばめられている。いずれもバンコクで印刷されており, ネパールで出版されている本としては格段に印刷がよい。トレッキングに持って行けば楽しくなること請け合いである。(鈴木三男)